意思を運ぶ箱。

箱にもいろいろありまして。
わたしたちが作っているのは「貼り箱」と呼ばれる、
少し高価（箱にしてはね）な箱です。
可愛いお菓子、高級な化粧品、腕時計、
ギフト商品など…さまざまなものが入ります。
でも、ですね。わたしたちが作りたいのは、
ものを入れるだけの箱ではありません。
ご依頼主の意思を、世の中に向けて表現する
存在でありたいのです。
わたしはこんな想いを持ったこんな人ですよという
“イメージ”も一緒に運ぶ箱。

（作っているのは、ブランドイメージです。）

貼り箱以上。村上紙器工業所

貼り箱を通して、ブランドをつくる！！
それは直接、商品の売れ行きを左右します。

パッケージによるブランディングとは？

商品のオリジナルパッケージやギフトボックスは、単に包む機能としての包装資材ではありません。商品の高級感や上質感を伝え、販売を促進する役割を担っています。パッケージを作るということは“ブランド価値”を伝えるブランディング・ツールとして投資することであり“ブランド資産”を生み出すことなのです。

マーケティングの本質は“価値の交換”といわれますが、それには機能的価値と情緒的価値があり、パッケージの役割はその両方を有しています。梱包するための機能的価値。一方、商品への期待感や箱から取り出す時のワクワク感が情緒的価値です。共感や関係性が重視される今の時代に必要とされている価値です。

つまりパッケージに情緒的関係を埋め込むことで箱のポテンシャルを最大化させるのが、パッケージによるブランディングなのです。

村上紙器工業所 urakami hand made box
オリジナルパッケージ（貼箱）企画・製造
〒557-0013 大阪市西成区天神ノ森1-19-8
TEL.06-6653-1225 FAX.06-6653-1925 URL:https://www.hakoya.biz/

ウェブサイトに掲載しているお客さまインタビューの一部をご紹介します。

「ありきたりのパッケージでは伝わらない。」

リルジーンファームジャパン株式会社
代表取締役　濱田明美さま
取締役　濱田浩司さま

リルジーンファームジャパン株式会社は、ハワイのコナコーヒーを輸入販売している会社です。単に輸入販売しているだけではなく、自社農園を持つ作り手でもあります。そして、何よりもコナコーヒーへのタダならぬ想いをお持ちなのです。愛するコナコーヒーをギフト商品に育てていくために、村上紙器工業所と出会い、パッケージを完成させていった経緯を濱田明美社長、濱田浩司取締役のお二人から、たっぷりと語っていただきました。

「それなりのコーヒーだから、それなりの見え方が必要。」

［濱田明美社長］期待以上というと失礼かもしれませんが、私たちの想像を超えたパッケージができあがりました。これからはさらに、いろんな面でこのブランドに似合った装いをしていかないといけないと思っています。パッケージができて、おかげさまで評価がグンと上がってきました。これからが、とても楽しみです。中身はすでにある程度まで突き詰めています。この商品はブランド物だと思っています。特別な物でありたいと願っています。だから、あえてオンラインに載せていません。誰もの目に気軽に触れることで、かえって価値が下がると思いますからね。

「真珠のイメージを変えるための箱が必要だった。」

株式会社光貴
代表取締役　野原 明さま
マネージャー　野原直貴さま

株式会社光貴は、心斎橋にオフィスを構え真珠を使ったジュエリーを自社でデザイン製造し、国内外へ販売している会社です。野原 明社長と、息子さんである野原直貴マネージャーから真珠への想い、自社ブランドのこと、村上紙器工業所との出会い、パッケージ（貼り箱）が出来あがっていくまでの経緯など興味深いお話をお聞きしました。

「工場を訪問して、そのこだわりに共感しました。」

［野原社長］会社を訪問して製造の現場を見せていただいて、説明を受けて、村上さんのモノ作りへのこだわりに強く共感しました。いろいろとおっしゃった中でも印象に残ったのは「箱が目立ってもダメです。」というひと言です。私もモノ作りの側の人間として、商品を引き立たせる役割に徹するという、その気持ちがよくわかりました。
村上さんの製造現場では、“手作りのこだわり”を実感しました。真珠も同じで、現場は手作りの混沌としたところがあるので、よく似ていました。そこに、親近感を感じたわけです。店頭のサンプルはすべて見せてもらいました。うちのスタッフもいろいろとアイデアを考えてくれていたので、村上さんと意見を交換しながらイメージを固めていきました。

「包装を解いて、箱が見えたときの印象がすべてだから。」

タイシコーポレーション株式会社
代表取締役 山本真三さま

タイシコーポレーション株式会社は、珍しいイベリコ豚専門のレストラン事業を中心にギフト通販や惣菜販売、ひいてはスペインに直営牧場まで展開されている会社です。山本真三社長から村上紙器工業所のパッケージ（貼り箱）を採用するに至ったきっかけ、パッケージに込められた想いなどをお聞きしました。

「カッコいいものしか、使わない。」

これは、私の信条みたいなものなんですが、パッケージに限らず、「カッコいいなあ」と言われるものしか使いたくないんですよ。村上さんと出会ったころ、ちょうど、ワンランク上の商品を出すので、良い箱がないかなあと、思っていました。

「別に箱に困っていたわけじゃないんですよ。（笑）」

いいタイミングだったんですね。取引のある信用金庫さんから、「いいパッケージの会社があるけど、いちど会いませんか」と、紹介されたんです。『貼り箱』というジャンルがあることは知りませんでした。パッケージは、どれも同じだと思っていました。信用金庫さんと一緒に訪問して、サンプルをいろいろ見せていただいて、その中に辞書型のものがありました。それを見てカッコいいなあと、思いました。自分の考えにピッタリだったので、そこから決めるまでは早かったですね。

「ただ詰めるだけの箱は、欲しくなかった。」

Lee. espoir
フラワーデザイナー　香山夕子さま

フラワーデザイナーの香山夕子さんが大阪市中央区南船場で経営する「Lee.espoir（リー・エスポワール）」は、ブライダルに特化したフラワーショップ。専業主婦だった香山さんが、約５年前にはじめたお店です。なぜ貼り箱を知り、村上紙器工業所とご縁を持つことに至ったかなどを話していただきました。

「他社ではいきなりできないと言われたけど、村上さんは真摯に相談に乗ってくれました。」

会ってみないと分からないというのが、わたしのやり方なんです。だから、検索でヒットした順に会いたいと連絡しました。でも、最初の２社はつくりたい箱を説明しただけで、「つくれない」「それは無理ですね」と、会う前に断られてしまいました。次に村上さんへお電話で相談したところ、会って話を聞いていただくことになりました。他の２社と違い、どうにかしてあげたいという雰囲気を、声からビンビン感じました。（笑）

インタビューの続きは、村上紙器工業所のWebサイトで読むことができます。　www.hakoya.biz ➡